

いちご「とちおとめ」の育成

1. 試験のねらい

本県のイチゴ栽培は「女峰」の促成栽培が主体で、収穫は11月から翌年5月頃まで長期にわたり行われているが、収穫後半に小玉果の発生割合が多くなったり、食味が低下するなどの傾向がみられ、生産・消費の両面からこれらの改善がなされた品種の育成が強く望まれている。そこで、これらの要望に応えるため大果・多収で品質が優れるイチゴ新品種の育成を行った。

2. 育成経過

平成2年に、多収である久留米49号と大果で品質が優れる栃の峰を交配し、その中から平成3年に90-12-25の系統を選抜した。平成4年に特性検定試験を行い、大果で食味がよく収量性も高いことが認められたので、平成5年に系統名を栃木15号とし、現地適応性を確認して平成6年6月に品種登録を出願し、平成8年11月に「とちおとめ」と命名し品種登録した(図-1)。

3. 特性の概要

(1) 形態的特性

草勢は強く、草姿は立性で、葉は厚く、濃緑色で大きくやや丸みを帯び上にやや湾曲する。分けつ性は中程度で、分けつ芽は比較的大きい。葉柄長は女峰よりやや短い。(表-1)

(2) 生態的特性

ランナー発生は女峰と同程度に多く発生する。花芽分化期は平地育苗では9月25日頃で、女峰と同時期であり、短日や低温等花芽分化促進処理には女峰と同程度に反応し早まる。根の発生は女峰より遅く、細根の割合が多い。頂花房での着果数は14、15花程度と女峰より少ない(表-1)。

(3) 果実特性

果実は平均15g程度の大果で、果形は円錐形、果皮果肉とも硬く日持ち性に優れる。糖度(Brix)は9~10度と高く、酸度は0.7%程度と低く、多汁質のため食味は極めて良い(表-2)。

(4) 収量特性

収量性は高く安定しており、促成栽培での収量は株当たり500g以上(4月まで)得られる。

(5) 耐病性

耐病性は特になく、炭そ病、うどんこ病、アブラムシ類等は女峰と同程度に発生する。

4. 栽培上の留意点

(1) 草勢が旺盛なので、ジベレリンや電照は特に必要ない。

(2) 土壌が乾燥している場合は、ランナーの先端が枯れたり、チップバーンがみられることもあるので、適度な灌水が必要である。

(3) 炭そ病等に対する耐病性は女峰と同程度であるので、同様な防除対策を行う。

5. 成果の要約

女峰に比べて大果・多収で品質が安定して優れ、さらに栽培しやすいなどの特性を有する促成栽培に適した、いちご新品種「とちおとめ」を育成した。

(担当者 栃木分場 石原良行*・高際英明) *現普及教育課

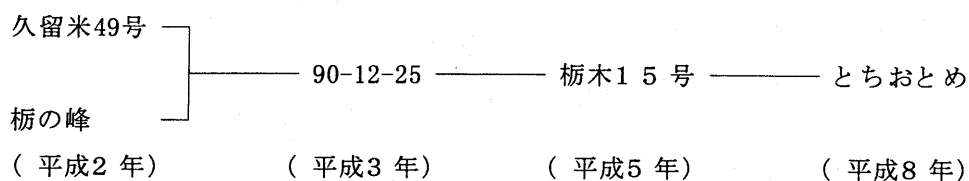


図-1 育成系統図

表-1 促成作型における育苗方法別の生育及び収量

育苗方法	品種	葉柄長 (12月13日) (cm)	収穫始 (月・日)	頂花房 着花数 (花/株)	時期別収量(g/株)				一果重 (g)
					～12月	1～2月	3～4月	合計	
夜冷	とちおとめ	10.5	12.6	11.2	81	205	235	521	14.9
	女峰	11.8	12.6	18.1	85	192	233	510	11.9
ポット	とちおとめ	12.1	12.6	14.6	68	210	210	488	15.0
	女峰	13.4	12.9	23.8	51	211	190	451	11.5
平地	とちおとめ	9.6	1.5	15.1	2	283	247	533	15.1
	女峰	10.6	1.5	21.4	1	298	212	511	12.4

注) 栽培概要: 夜冷育苗は夜冷短日処理8月23日～9月16日、定植9月17日。
ポット育苗は採苗7月5日、定植9月27日。平地育苗は採苗7月28日、
定植9月27日で、いずれも保温開始は10月23日とした。

表-2 果実特性

品種	糖度 (Brix)	酸度 (%)	硬度(g/φ2mm)		果形	果皮色	光沢	香気	空洞
			果皮	果肉					
とちおとめ	9.7	0.99	77	185	円錐	鮮赤	良	中	極小
女峰	8.2	1.07	54	138	円錐	鮮赤	良	中	極小

注) 糖度、酸度、硬度は各育苗方法ごとに12月から4月まで各月2回調査した平均値。